近世の終末論とイェルサレム巡礼
―モーセス・バゾーラとディエゴ・デ・メリダを例に―

関　哲 行（流通経済大学名誉教授）

Early Modern Eschatology and Pilgrimage to Jerusalem

Tetsuyuki SEKI
Professor Emeritus, Ryukyu Keizai University

Jerusalem is a multi-layered city with three major monotheistic holy places in Judaism, Christianity, and Islam. The three main monotheistic holy places are the Wailing Wall, the Church of the Holy Sepulchre, and the Dome of the Rock. Therefore, many pilgrims from all over the world, including Japanese, have made a pilgrimage to Jerusalem, which was considered the "center of the world", or have participated in ziyara.

Among those who made the pilgrimage to Jerusalem in the first half of the sixteenth century, during the Reformation and the Age of Discovery, and left behind pilgrimage accounts are Moses Basola, a Jewish rabbi from northern Italy, and Diego de Mérida, a monk from the monastery of Guadalupe in mid-western Spain. Based on the pilgrimage accounts of these two men, who were strongly influenced by Eschatology, Messianic thought, and Mysticism, I would like to depict a part of the pilgrimage to Jerusalem in the early modern era.

Moses Basora set out for the pilgrimage to Jerusalem in a Venetian ship and entered the city of Jerusalem by horse and camel. In Jerusalem, he passed through Mount Zion, where David's sepulcher is located, and Mount Olive, which is considered to be the site of the Last Judgment, but the Muslim authorities forbade him to approach the Wailing Wall, so he prayed to God from Mount Zion. Diego de Merida also visited the Church of the Holy Sepulchre, Via Dolorosa, Cenacle of the Last Supper on Mount Zion, and other places while staying at a hospital for pilgrims, guided by the Franciscans who had established a monastery in Jerusalem since the 14th century. It is noteworthy that the Franciscans, who co-managed the Church of the Holy Sepulchre with the Eastern Churches and "developed" Via Dolorosa, played an important role in the Catholic pilgrimage to Jerusalem.

1.はじめに

「世界の中心」イェルサレムは、イエスの墓所とされる「聖墳墓教会」、ユダヤ教最大の聖所「嘆きの壁」、ムハンマドゆかりの「岩のドーム」を擁する世界有数の聖地である。キリスト教、ユダヤ教、イスラームという三つの一神教の主要聖跡が、旧市街という狭い空間内に密集する聖都は他に例がない。そのため古くから、イェルサレムにはカトリックとユダヤ人（ユダヤ教徒）、ムスリム巡礼者が霊的物的利益を求めて参集した。15世紀末～16世紀前半のカトリックとユダヤ人も、例外ではなかった。[1]

カスティーリャ女王イサベル１世とアラゴン王フェルナンド２世が共同統治した、カトリック両王期に、スペインは「絶対王政（強権的王政）」への傾斜を強め、「スペイン帝国」の主要基盤を構築した。1492年にナスル朝グラナダ王国を攻略し、ユダヤ人追放令を発したのみならず、コロンブスのアメリカ「発見」を機に中南米開発に着手する。カルロス１世が神聖ローマ皇帝を兼ねた1520年代にスペインは、アステカ帝国を征服し、イタリア戦争や宗教改革に関与して、イタリアやドイツその他を含むヨーロッパの「覇権国家」へと変貌した。ピレネー以北との人や情報の移動が更なる発展をみた15世紀末～16世紀前半のスペインでは、多数の知識人が人文主義思想を受容した。その一方、アメリカ「発見」やユダヤ人追放、ムデハル（キリスト教徒支配下のムスリム）追放による宗教的統合に触発され、メシア思想と終末論がカトリックやユダヤ人、コンベルソ（改宗ユダヤ人）を含む多くの人々の内面を捉えた。[2]

こうした状況下の16世紀第１四半期に、聖地イェルサレム巡礼を実践したのが、グアダルーペ修道院の修

道士ディエゴ・デ・メリダDiego de Mérida（？～1518年）と、北イタリアの中小都市ペーザロのラビでユダヤ神秘主義者のモーセス（モーシェ）・バゾーラMoses Basola（1480年頃～1560年）であった。[3] 以下では、この２人のパレスティナ巡礼記を手掛かりに、近世初期のスペイン人とユダヤ人によるイェルサレム巡礼の様態を探りたい。

２.終末論とメシア思想

「スペイン帝国」が構築された15世紀末～16世紀前半は、コンスタンティノープル陥落から50～100年後にあたり、終末論やメシア思想が台頭した時代であった。ローマ帝国の継承国家であるビザンツ帝国滅亡の約40年後に、グラナダが陥落したのみならず、ユダヤ人追放令によりユダヤ人は追放か改宗かの二者択一を迫られた。これらはコロンブスのアメリカ「発見」と共に、終末の予兆とされ、カトリック両王はイェルサレム奪還に強い関心を示した。しかもフェルナンド２世は1510年、イェルサレム王の称号を教皇ユリウス２世から認証されたのである。フェルナンド２世によるマグリブ地方のメリーリャ、オラン攻略、カルロス１世によるアルジェ、チュニス遠征は、「聖墳墓教会」を擁する聖地イェルサレム奪還の一環であり、終末論やメシア思想と密接に関わっていた。[1]

コロンブスも同様である。ジェノヴァ商人であったコロンブスは、金と香辛料に最後まで固執し、極限まで利潤（現世的利益）を追求する一方で、メシア思想や終末論に強い執着をみせた。フランシスコ（フランチェスコ）会厳修派との緊密な関係 ―― コロンブスとイサベル１世は共にフランシスコ会の在俗会員であったといわれる ―― も、ここに起因している。フランシスコ会厳修派を介し、フィオレのヨアキムの影響を受けたコロンブスは、世界の終末を意識しており、『預言の書』の中で、それを155年後の1656年と算定した。世界の終末とその後に到来する「神の王国」実現のためには、イェルサレムを解放し、全世界に神の言葉を宣べ伝える必要がある。こうしたメシア的使命を果たすのは、カトリック両王に他ならず、1492年のグラナダ攻略とユダヤ人追放、多くのユダヤ人とムスリムの改宗は、神による人類救済の第一歩を画するものとされた。ここに終末論とメシア思想が連動し、アメリカ「発見」も同一の宗教的文脈の中に位置づけられる。[2]

終末論とメシア思想は、迫害と追放に苦しむユダヤ人、とりわけユダヤ知識人に大きな影響を与えた。中世末期～近世のユダヤ神秘主義者は、反ユダヤ運動の激化を背景に、幻視や奇跡、「ダニエル書」――『旧約聖書』の中にあって最も黙示録的色彩が強く、終末とメシアに言及した「ネブカドネザルの夢」を含む ―― を重視し、終末の予兆に大きな関心を示した。同時に清貧と戒律遵守による神との直接的交感を説き、敬虔なユダヤ人民衆こそメシアによる救済の対象に他ならないとした。[3]

彼らの「ダニエル書」解釈によれば、メシアは天地創造から7000年後にあたる16世紀前半に、聖地イェルサレムもしくはユダヤ戦争の拠点となった、ガリラヤ湖北部の都市サフェド（ツファット）近辺に到来する。メシアは聖地を異教徒の手から奪還して、神殿を再建するのみならず、正義と平和の支配するユダヤ人の王国を樹立して、ヨーロッパ全域で迫害と追放に苦しむユダヤ人を救済する。終末の予兆とされたのは、ヨーロッパ・キリスト教世界での大規模なユダヤ人迫害、シスマ（教会分裂）と宗教改革、ビザンツ帝国の滅亡、オスマン帝国によるパレスティナ支配であった。ビザンツ帝国の滅亡が終末の予兆とされたのは、ビザンツ帝国が、第二神殿を破壊したローマ帝国（第四の帝国）の継承国家であったことに由来する。[4]

終末におけるユダヤ人迫害は神の試練であり、それに耐えた敬虔なユダヤ人のみが、やがて到来するメシアによって救済されるであろう。15世紀末～16世紀前半のユダヤ人社会では、ユダヤ神秘主義と密接な関係をもつ終末論とメシア思想が広く浸透していた。「追放第一世代」に属するユダヤ神秘主義者のモーセス・バゾーラも、終末論とメシア思想に突き動かされて、イェルサレム巡礼を実践した。[5]

終末

3．聖地パレスティナへの船旅

ディエゴ・デ・メリダとモーセス・バゾーラは、上陸地点は異なるものの、いずれもヴェネツィア船を利用して、イェルサレム巡礼を果たした。当時、ヴェネツィアとパレスティナ間には定期航路が開かれており、ヴェネツィア人はこの海域の航行に習熟していた。宗教の異なる二人が、ヴェネツイア船を利用した主たる理由である。ディエゴ・デ・メリダとモーセス・バゾーラの乗船記には、宗教規範関連の記述を除き基本的相違はなく、ここでは前者の記述を基に、当時の船旅の実態を素描したい。

㈠ 出立準備と乗船契約

ヴェネツィアに到着すると巡礼者は、まずヴェネツィアの象徴ともいうべき聖マルコ教会に足を運び、聖遺物 —— ガラスの小瓶に入ったイエスの聖血や十字架の断片 —— に接した。東方貿易の拠点都市ヴェネツィア市内には、複数の外国語に堪能な巡礼案内がいて、外国人巡礼者への道案内や宿の手配、巡礼行に必要な物品の購入に便宜を図った。長期間の船旅と炎天下での聖跡巡りの双方を含む、イェルサレム巡礼にあっては、風雨を凌ぐ防水コートと毛布、靴 —— 異郷の地を経巡る長旅であることから、巡礼者の足に合った靴は重要 ——、敷き布団、衣類、コップその他の食器、悪臭や船酔い防止のための芳香塩、薬草、非常用食料が不可欠であり、これらをヴェネツィアで購入した。[1]

ヴェネツィア

備品を取り揃えた巡礼者は、ヴェネツィア人巡礼案内に助けられて、ガレー船の船長 —— 船主を兼ねる場合が多い —— と渡航費用、航海中の食事や利用スペース、サービスなどについて契約書を取り交わした。ヴェネツィアではフランシスコ会が、パレスティナ巡礼者向けの巡礼案内（ガイドブック）を販売しており、パレスティナ巡礼者の一部は、これを購入して乗船したものと思われる。活版印刷機で大量に刷られた、15～16世紀前半のガイドブックは、巡礼者の持ち込んだ釣り竿と共に、長旅の無聊を慰める格好の手段となったに違いない。[2]

㈡ 渡航費用とガレー船

ヴェネツィアからヤッファ（現テルアビブ）までの渡航費用は、サービス内容や時期によって変動したため、その算出は容易ではない。1507年にパレスティナ巡礼を実践した、グアダルーペ修道院の修道士アントニオ・デ・リスボアは、ヴェネツィアとヤッファの往復運賃として62ドゥカードを計上している。半額を出発時にヴェネツィアで支払い、残金を帰路、ヤッファで納入した。アントニオ・デ・リスボアは、130人のパレスティナ巡礼団の一員として参加しており、その渡航費用は平均的な額であったとみてよい。15世紀末のスペインの１ドゥカード貨は374マラベディに相当し、従って62ドゥカードは約23000マラベディという計算になる。15世紀末のセビーリャの建設業関連の親方の日給は、50～60マラベディなので、日曜日や祭日を除き300日働いたとして、年収は16500マラベディ程度であった。パレスティナ巡礼者の渡航費用だけで、大工やレンガ職といった建設業関連親方層の年収の１．５倍近くに達したのである。渡航費用以外の諸経費 —— ヤッファからイェルサレムまでの通行料、ムスリム当局や警護兵への支払い、「聖墳墓教会」などへの入場料、聖地パレスティナでの滞在費用など —— を加算した場合、パレスティナ巡礼の総経費は、更に膨らみ、民衆の年収の５～６年分を優に上回った。パレスティナ巡礼は多くの民衆が参加できる巡礼行ではなく、貴族や聖職者、有力市民、知識人を主体とする「特権的巡礼」に他ならなかったのである。[3]

パレスティナ巡礼者が乗船したのは、２～３本マスト、全長450メートル、400～600トンほどの大型ガレー船で、多くの船員と漕手が乗り組んでおり、平時は帆走したものの、出入港時と緊急時にオールを併用した。大型ガレー船の船尾には三層の船尾楼があり、最上層に船長と操舵手、水先案内人が陣取り、窓のない中下層は女性巡礼者の船室、武器庫や弾薬庫として使用された。小型大砲を装備した船尾楼の向い側に厨房と家畜小屋が置かれ、厠は船の後方に設えられていたが、多くの男性は厠を使わず銃眼から排泄した。甲板にはミ

サのための祭壇が設けられ、波が静かで晴天の日には、折り畳み式のテーブルで食事をとることもできた。[4]

(ウ) 過酷な船旅、渡航日数と寄港地

ガレー船は通常、５～８月にヴェネツィアを出発し、アドリア海、イオニア海、エーゲ海を経てヤッファに入港した。気候条件や政治・軍事状況にもよるが、往路に５週間、復路に７週間ほどを要し、ヴェネツィアとヤッファ間を２～３往復した。ガレー船には医者、書記（兼会計担当）、通訳、船の修理工、ポーター、ボーイ、コックなども乗り組んでおり、巡礼者を含む乗客の様々な要望に応えようとした。しかし実際の船旅は、想像以上に過酷で、体調を崩し落命する者も少なくなかった。1518～19年にヴェネツィア船を利用して、イェルサレム巡礼を断行した、スペインの有力貴族タリファ公の巡礼記によれば、医者（内科医）を配置するとの乗船契約に反し、実際に同乗していたのは、医者ではなく床屋――当時、外科医を兼ねた――であったし、食事サービスも劣悪であった。パンは堅い黒パンで、ネズミがかじった痕があり、水は悪臭がするので、鼻をつまんで飲まざるをえなかった。肉は硬い上に塩分がきつく、新鮮な肉や水は不当に高額で、時化の時には温かい食事すら提供されなかった。[5]

ヤッファへの船旅は、海賊やオスマン海軍の脅威に常に晒されていたばかりか、ガレー船内は「すし詰め状態」で、詐欺や窃盗、喧嘩が絶えなかった。シラミやネズミが跋扈し、衛生状態も悪く、敷布団の傍に置いた尿瓶で排泄することもしばしであった。船酔いで嘔吐する巡礼者が続出する中、巡礼者の大多数を占める男性巡礼者は、ワインや水樽を含む荷物を船室――甲板下の船倉にあった――の中央に置き、そこに足を向け毛布を纏って床に寝た。巡礼者のプライバシーが担保されず、悪臭の漂う状況下に実践された「苦難の長旅」といってよい。芳香塩が不可欠とされる所以である。[6]

ヤッファでパレスティナ巡礼者を下船させたガレー船は、20日前後同港に停泊した後、再び巡礼者を乗せて、ヴェネツィアに帰港した。ヴェネツィアからヤッファまでの距離は、片道約2700キロメートル、主要寄港地はヴェネツィア領のラグーザ、コルフ島、クレタ島、ロードス島、キプロス島――1525年にオスマン帝国の支配下に編入――であった。寄港地には小舟で上陸し、数日～１週間ほどの滞在中、巡礼者は新鮮な地元料理や地酒を堪能しつつ、イエスや聖母マリア、聖人ゆかりの聖跡を訪れた。ディエゴ・デ・メリダも同様で、キプロス島ニコシア内外にある、奇跡譚で知られた聖マメス、聖コスメ、聖ダミアンの墓所に参詣している。ディエゴ・デ・メリダが特に関心を寄せたのが、万病に効くオリーブ油を産する聖マメスの墓所で、全島民の崇敬を集める聖跡であった。[7]

４．２人のイェルサレム巡礼者

(1) ディエゴ・デ・メリダ

ディエゴ・デ・メリダは、エストレマドゥーラ地方の名刹で、ヒエロニムス会に属するグアダルーペ修道院の修道士であった。「黒いマリア像」を祀ったグアダルーペ修道院は、モンセラート、サラゴーサ、アンドゥーハルと並ぶスペインの四大マリア聖地の一つに数えられ、イサベル１世やコロンブスも深く帰依した修道院である。前述のようにイサベル１世とコロンブスは、終末論やメシア思想の影響を受けており、ディエゴ・デ・メリダがそれと無縁であったとは思われない。メシアが到来するとすれば、それはイエスゆかりの聖地イェルサレム以外にはありえず、イェルサレムの「黄金の門」の開放は、メシア到来の予兆とされた。[1]

グアダルーペ修道院

(ア) 聖地イェルサレムへ向けて

ディエゴ・デ・メリダは、イサベル１世没後の1507年にパレスティナ巡礼に出発し、カスティーリャ、カタルーニャ、南フランスなどを経由して、パレスティナ巡礼の起点都市ヴェネツィアに入った。ヴェネツィアのベネディクト会修道院滞在中に、ロードス島の聖ヨハネ騎士団の騎士と昵懇になり、彼の甥にあたるキ

プロス総督への紹介状を恵贈された。同時期にパレスティナ巡礼を実践した、グアダルーペ修道院の修道士アントニオ・デ・リスボアによれば、ヴェネツィアでは130人の巡礼者がガレー船に乗り込んでおり、ディエゴ・デ・メリダも数多い巡礼者の一人として、５～８月にヴェネツィアを出港したものと思われる。同乗者にはシオン山のフランシスコ会修道院長も含まれていたが、旅費が不足し、キプロスに１年以上滞在した。滞在というよりもむしろ、旅費調達のために、キプロス総督の屋敷に寄寓したといった方が正確だろう。キプロス島では、聖パウロや聖ベルナベの聖跡を訪れた後、フランシスコ会の修道士や俗人と共に巡礼講を組織し、ジェノヴァ船でヤッファに入った。[2]

講仲間と共にヤッファに到着すると、船長は通訳と共に下船し、ムスリム当局から巡礼者の通行許可証を取得する手続きに着手した。通過都市ラムラや聖地イェルサレムの通行・滞在許可証の発給には、流通税を支払い、巡礼者の署名入りの証明書を提出する必要があった。通行許可証が発給され下船しても、更に数日はヤッファ市内で待機しなければならなかった。シオン山のフランシスコ会士が到着し、巡礼者の荷物運搬に携わるムスリムのラバ追いや警備兵を雇用した上で、やっと巡礼講はヤッファを出発することができた。ヤッファからラムラまでの送料はラバ１頭につき2.5レアル（約0.23ドゥカード）、警備兵隊長の俸給は、巡礼者１人あたり2.5レアルであった。[3]

ヤッファ東方の中小都市ラムラでは、フランシスコ会の設立した施療院 —— キリスト教徒の巡礼者は、施療院外への外出禁止 —— に宿泊した。同施療院は礼拝堂に加え、３つの井戸と多くの部屋を備えており、600人以上の巡礼者が宿泊可能であった。施療院管理人夫婦は住み込みのキリスト教徒で、巡礼者への食事・宿泊サービスを提供した。その代価として巡礼者は、１レアルを置いてくるのが習わしであった。ラムラ滞在中に、現地ガイド兼通訳が合流し、ラムラからイェルサレムまでの通行料やラバの賃料を再度支払い、聖地イェルサレムへ向け出立した。追剝や盗賊の危難を回避するため夜間の強行軍であったが、早朝、イェルサレムのフランシスコ会修道院に無事到着し、同修道院の運営する施療院 —— 巡礼者は２日間、無料で食事・宿泊サービスを享受できた —— に身を落ち着けた。[4]

(イ) イェルサレムの聖跡巡拝

フランシスコ会士の案内で、まず巡礼者が向かったのは、「ゴルゴタの丘（カルヴァリオ山）」に建つイエスの墓廟で、全贖宥が得られる、キリスト教最大の聖跡「聖墳墓教会」である。巡礼者はイェルサレム滞在中に３度、即ちイェルサレム到着の翌日、滞在中日と出立前日に、「聖墳墓教会」で夜の祈りを捧げなければならなかった。「聖墳墓教会」において巡礼者は、フランシスコ会士による説教に耳を傾け、イエスの苦難と復活に思いを馳せつつ、カトリックとしての然るべき行為を促されたのである。「聖墳墓教会」の前にも、フランシスコ会の運営する施療院があり、巡礼者はそこで食料品や土産物を購入することができた。[5]

「聖墳墓教会」に入る巡礼者

次いで巡礼者は「最後の晩餐会堂」、聖母マリアが幼子イエスの産着を洗った「聖母の泉」、イエスがイェルサレム入城時に利用した「黄金の門」、ヨセファトの谷にある「聖母マリアの墓所」、預言者ザカリア（洗礼者ヨハネの父）の墓所に参詣した。イエスゆかりの「悲しみの道」も辿り、「悲しみの道」の起点「ピラトの館」、聖顔布で有名な聖女ヴェロニカの家、マグダラのマリアの家、聖ペテロが投獄されていた獄舎などを訪れた。イェルサレム市内の聖跡 —— 多くは『新約聖書』ゆかりの聖跡 —— 巡拝が終わると、ベツレヘムの「イエスの生誕教会」に足を延ばした。ベツレヘムにもフランシスコ会の修道院と施療院があり、巡礼者はその施療院に投宿することが可能であった。[6]

(ウ) イェルサレム巡礼とフランシスコ会

イェルサレム巡礼とフランシスコ会との密接な関係は、アッシジの聖フランチェスコによるイェルサレム巡礼に遡る。アッシジの聖フランシスコ —— 1219～20年にパレスティナ巡礼を実践 —— の宗教的理想を重視

するフランシスコ会は、十字軍撤退後もマムルーク朝のスルタンの保護下に、聖地パレスティナに残留した。1342年、教皇クレメンス６世から聖地管理権を認可されたフランシスコ会は、シオン山などに修道院を保持し、数十名の修道士が共同生活を営んだ。15世紀に入るとマムルーク朝のスルタンから一定の自治権を認められ、ギリシア正教会やコプト教会などの東方教会との関係を維持しながら、カトリックのパレスティナ巡礼者の保護に尽力した。(7)

こうした中でシオン山のフランシスコ会士は、パレスティナ巡礼者の改悛と純化を目的とした巡礼ルートを「開発」した。イエスが死刑判決を受けた「ピラトの館」から、イエスの墓所とされるカルヴァリオ山（「聖墳墓教会」）に至る「悲しみの道」がそれである。「悲しみの道」は、巡礼者がイエスの受難を追体験し、内面的回心を遂げる上で決定的に重要な「装置」であり、アンダルシーア地方の主要都市セビーリャを始め、ヨーロッパ全域にその「移し」が創出された。「悲しみの道」は、16世紀初頭のヤッファにフランシスコ会が建設した大規模な施療院 —— 約600人の巡礼者を収容 —— と共に、15世紀後半～16世紀前半のパレスティナ巡礼の拡大に大きく寄与した。(8)

「悲しみの道」

フランシスコ会は「聖墳墓教会」に加え、シオン山の「最後の晩餐会堂」やベツレヘムの「イエスの生誕教会」などで東方教会と共に、宗教儀礼を実践する権利を認知されていた。カトリック両王やカルロス１世が、イェルサレムの「教皇代理（シオン山のフランシスコ会修道院長）」を支援した背景であり、15世紀後半～16世紀前半のパレスティナ巡礼者増大の一因となった。1516～17年のオスマン帝国によるパレスティナ、エジプト併合は、イェルサレム巡礼の動向に大きな影響を与えたが、フランシスコ会がシオン山の「最後の晩餐会堂」から追放されるのは、1552年のことである。(9)

(エ) キリスト教の多様性とシンクレティズム

聖地イェルサレム内外の聖跡巡拝の過程でディエゴ・デ・メリダは、キリスト教の多様性、イスラームとのシンクレティズムを体験する。言語と宗教儀礼を異にし、西ヨーロッパで異端とされた東方教会（ギリシア正教会、コプト教会、アルメニア教会、グルジア教会、シリア教会、マロン派）が大きな存在感を示し、ラテン教会（フランシスコ会）と共に、「聖墳墓教会」の主祭壇でミサを執り行っているばかりではない。ムスリム巡礼者は、ヨセファトの谷の「聖母マリアの墓所」—— 聖母マリア（アラビア語でマリアム）はムスリムにとっても崇敬対象 —— にも参詣しており、イスラームとのシンクレティズムに驚きの目を向ける。「聖墳墓教会」に参拝するキリスト教徒巡礼者への不法行為も、根拠のない風評とし、西ヨーロッパの偏狭なムスリム排斥論を拒否するのである。経験に裏打ちされたディエゴ・デ・メリダの言説の中に、人文主義的知性の一端を看取することは不可能ではあるまい。(10)

(2) モーセス・バゾーラ

「第二のディアスポラ」ともいうべき1492年のユダヤ人追放は、中世末期～近世のユダヤ人に大きな衝撃を与え、宗教改革やオスマン帝国によるコンスタンティノープル攻略と共に、ユダヤ人の終末論やメシア思想をいっそう刺激した。終末論やメシア思想が、イェルサレム巡礼と不可分であることは言うまでもない。この時期にイェルサレム巡礼を実践し、『パレスティナ巡礼記』を著したユダヤ神秘主義者（カバリスト）が、モーセス・バゾーラである。(11)

(ア) ユダヤ教の巡礼と参詣

ユダヤ人は過越祭（３～４月）、七週祭（５～６月）、仮庵祭（９～10月）の年３回、「救済の地」にして「メシア再臨の地」とされるイェルサレムへの巡礼 aliyah を義務づけられていた。しかし第二神殿崩壊後の離散地のユダヤ人にとって、年３回の聖地巡礼は不可能であり、中近世には生涯に一度の聖地巡礼が理想とされた。中近世のユダヤ人巡礼者が目指したのは、ユダヤ教の四大聖地イェルサレム、サフェド（ツファット）、

ティベリアス、ヘブロンであった。これらの四大聖地のうち、中世末期～近世にかけて「メシア再臨の地」とされたのが、イェルサレムとサフェドである。そのため16世紀のユダヤ神秘主義者は、２つの聖地をことのほか重視した。こうした聖地巡礼の他にユダヤ人は、病気治癒や雨乞いなどの現世利益を中心とする参詣ziaraも実践したが、その対象となったのは、奇跡譚で知られる在地のラビや義人zaddikの墓所であった。ヘブライ語の参詣ziaraは、現代に入りアラビア語ziyāraから借用されたものであり、モーセス・バゾーラにあっては巡礼と参詣は区別されず、両者は相互浸透していた。[12] カトリックの巡礼者と同様に、巡礼と参詣を区別することなく実践していたことは、注目してよい。

(イ) 終末論と巡礼

ユダヤ人追放という精神的トラウマを引きずった16世紀のユダヤ人にとって、終末論とメシア思想はユダヤ人共同体の再生に不可欠であった。メシア到来は終末とユダヤ人救済の前提であり、メシアが到来するとすれば、それは「約束の地」パレスティナ以外にはありえなかった。こうした中で神秘主義者を含む多数のユダヤ人が、メシアを期待して聖地巡礼を果たし、一部はパレスティナに定住した。とりわけ多くのユダヤ人巡礼者を引きつけたのが、イェルサレムとパレスティナ北部、ガリラヤ湖北方の都市サフェドであった。サフェドはエチオピアもしくはアジア出身とされる「黒いユダヤ人」ダヴィド・ハー・レウヴェニ（1490頃～1538年）が、メシアを僭称した地に他ならない。一時期ムスリムの戦争捕虜奴隷となっていた彼は、同胞ユダヤ人により解放された後、サフェドへ赴き、ユダヤの「失われた十部族」の一つレウヴェニ族の王弟、ユダヤ人を異教徒の支配から解放するメシアを称した。メシア到来のニュースはヨーロッパにも伝えられ、ユダヤ神秘主義者を含む16世紀のユダヤ人に大きな衝撃を与えた。[13]

ガリラヤ湖

ユダヤ神秘主義者のラビ、モーセス・バゾーラは、ダヴィド・ハー・レウヴェニがメシアを僭称した時期（1521～23年）に、イェルサレムを含むパレスティナ巡礼を実践し、『パレスティナ旅行記』を書き残している。その序文で彼は、火星と金星、木星が同一の軌道に入る1529年まで戦争と混乱の時代が続くが、やがてユダヤ人救済の機運が高まり、メシアが到来するであろうと言明する。同書巻末でも、「十部族来る」とのアッシリア語の書付をくわえた鳩に言及しており、モーセス・バゾーラが終末とメシア到来を強く意識しつつ、聖地を巡歴したことは間違いあるまい。[14]

(ウ) ユダヤ人の巡礼

ユダヤ人巡礼者は出立に先立ち、巡礼行に不可欠の靴、衣服、帽子、食料、為替手形などを準備しなければならなかった。各地でユダヤ人への収奪が日常化していたことから、武器を携行する巡礼者も少なくなかったであろう。参入儀礼については不明な点が多いが、出立準備を整えた巡礼者は、シナゴーグや義人の墓所で旅の安全を祈願し、貧民救済などの慈善活動 —— 危険な巡礼行での神の恩寵確保の条件とみなされた —— を実践したものと思われる。その上で親族や知人、兄弟団、ユダヤ人共同体（アルハマ、カハル）役人などに見送られて、巡礼行に出発した。巡礼者は個々のユダヤ人の病気治癒、来世での救済などに関する書付のみならず、ユダヤ人共同体全体の安寧に関する書付を、聖地に奉納する義務を負っていたのである。[15]

巡礼情報としては、モーセス・バゾーラの『パレスティナ巡礼記』が示唆的である。そこにはパレスティナの簡便な地図、船旅の心得、訪ねるべき都市と族長、預言者、義人の墓廟一覧、奇跡譚が含まれている。各地のユダヤ人共同体の状況と物価、通行税、旅の危険に加えて、終末とメシア到来の予兆に関する宗教情報も記載されている。ユダヤ人巡礼者は、文字言語によるこうした移動情報にも支えられながら、聖地巡礼を実践したのである。[16]

ユダヤ人巡礼者は巡礼行の過程で、度量衡詐欺や略奪、病気や怪我など様々な危険と不法行為に直面した。それに対処するためユダヤ人巡礼者は、出発地点もしくは旅の途上で、自衛のための相互扶助組織たる巡礼

講を組織し、巡礼歌 ―― 神殿巡拝と神への賛歌を歌った詩編42、84、122など ―― を口ずさみながら複数で移動した。ユダヤ人はカシュルート（清浄な食物）と呼ばれる食物規制も義務づけられており、この点からも巡礼講を介した集団移動が適合的であった。[17]

巡礼講に結集したユダヤ人巡礼者は、通行税や人頭税を支払って在地権力の保護を確保した。聖地パレスティナではさらにムスリムのキャラバンと契約し、安全性を二重に担保しながらラバやラクダで移動したのである。地中海各地のユダヤ人共同体は、巡礼者のための施療院や宿泊施設 ―― 質素な食事・宿泊・医療サービスを提供 ―― を運営しており、ここからも援助を期待できたのであった。聖地での基本的移動手段は、前述のようにラバとラクダであり、徒歩に宗教的意味が付与されることはなかった。ユダヤ教では巡礼行の過程、即ち「苦難の長旅」の追体験による回心以上に、結果、別言すれば聖地到達と聖地での神への祈りが重視された。それが、ユダヤ教とキリスト教の贖罪観の相違と相俟って、ラバやラクダによる移動を正当化したのである。[18]

1521年８月にヴェネツィアを出帆したモーセス・バゾーラは、９月にレバノン北部の都市トリポリ（タラーブルス）に上陸した。モーセス・バゾーラが二人のユダヤ人講仲間とともに、ラクダでまず向かったのは聖地サフェドであった。サフェドが最初の巡礼地に選ばれたことは、16世紀のユダヤ人神秘主義者にとってサフェドが、イェルサレムと同等あるいはそれ以上の重要性を有したことを意味する。[19]

聖地サフェドでモーセス・バゾーラは、ローマ時代の義人イェフダ・バール・イライ、ヒレル、アッバ・ハラフタなどの墓廟を巡拝し、奇跡譚を書き留める。あるムスリム女性がアーモンドの木から落下して怪我をしたが、イェフダ・バール・イライの墓廟に金のブレスレットを奉納し、オリーブの木を植えたところ快癒した。ヒレルは雨乞い祈願に霊験あらたかな義人で、好ましからざる女性がこの洞窟に入ると、手にした蠟燭の火が消える。アッバ・ハラフタは水利権訴訟に敗れたユダヤ人の夢枕に現れ、最終的にそのユダヤ人を勝訴に導いた。ローマ支配下の義人シモン・バール・ヨハイの墓廟にも、終末の予兆を確認すべく多数のユダヤ人が参拝したとの記述がみられ、義人、墓廟（聖遺物）、奇跡（現世利益）への強い関心が窺われる。ムスリム女性の怪我快癒も、シンクレティズムを想起させる。[20]

サフェドを発ったモーセス・バゾーラは、清浄儀礼を行った上でハヌカ祭の時期の11月、最大の聖地イェルサレムに入った。イェルサレムでは神の臨在する「神殿の丘」と、ユダヤ人の原罪消滅の証とされた「嘆きの壁（西壁）」が、最も重要な聖跡であった。しかし当時のユダヤ人巡礼者は、これらに接近できず、「神殿の丘」に近い「最後の審判の地」オリーブ山に集合し、神への祈りを捧げ神殿破壊を嘆いた。オリーブ山には前６世紀の預言者ゼカリヤ、前７世紀の女性預言者フルダなどの墓廟があり、シオン山にはダヴィデ王の墓廟が配されていた。オリーブ山とシオン山は、ムスリムやカトリックの巡礼者が訪れる聖跡でもあった。オリーブ山近くのアブサロム ―― ダヴィデ王に謀反を起こした同王の息子 ―― の墓廟では、墓廟に投石するのがユダヤ人巡礼者の習わしであった。アブサロムの墓廟への投石は、メッカ巡礼者によるミナーの谷での悪魔の石柱への投石を想起させる。モーセス・バゾーラはキリスト教徒最大の聖跡たる「聖墳墓教会」にも言及するが、ユダヤ人にとってイエスは異端者であったことから、簡潔な記述に終始している。[21] ユダヤ教、キリスト教、イスラームの主要な聖跡が「共存」したイェルサレムは、三つの一神教の巡礼相互の布置、あるいは巡礼と参詣の関係性を検証する上で、重要な聖地である。

「嘆きの壁」と「岩のドーム」

５．結びにかえて

ユダヤ教、キリスト教、イスラームの主要聖跡が重層化し、狭い空間の中に密集する聖地イェルサレム。ディエゴ・デ・メリダとモーセス・バゾーラは、終末論とメシア思想が高まりをみせた16世紀第１四半期に、

ヴェネツィアを起点に「聖墳墓教会」と「嘆きの壁」を擁する、イェルサレム巡礼を果たした。イェルサレムに入城したディエゴ・デ・メリダは、在地のフランシスコ会士の案内で、またフランシスコ会の施療院に宿泊しながら、「聖墳墓教会」や「悲しみの道」をはじめとするイエスゆかりの聖跡を巡拝した。ガイドブックに基づいて定型化された巡礼の目的は、イエスの「苦難の長旅」の追体験による、巡礼者の純化と回心にあった。フランシスコ会の開発した「嘆きの道」も、そうした「回心装置」の一つに他ならない。

ユダヤ神秘主義者のモーセス・バゾーラは、様々な予兆から世界は16世紀第１四半期に終末を迎え、メシアが到来すると確信していた。彼の巡礼の目的は、迫害と追放に苦しむユダヤ人を救済するメシアを、自らの目で確認することにあり、メシア臨在の地とされる聖地イェルサレムとサフェドを巡歴した。しかしイェルサレムにあってユダヤ人巡礼者は、「嘆きの壁」への接近を許されず、「神殿の丘」近くのオリーブ山で神への祈りを捧げた。サフェドでは、奇跡譚で有名なローマ時代の複数の義人の墓所に巡拝し、ユダヤ人やムスリムへの現世利益について詳述する。巡礼と参詣の互換性ないし相互浸透、義人の墓所や「聖母マリアの墓所」での、ムスリムやカトリック巡礼者とのシンクレティズムは、四国巡礼を含む比較巡礼史の視点からも注目してよい。[(1)]

註

１．はじめに

⑴　関　哲行「近世初期スペイン人のパレスティナ巡礼ーディエゴ・デ・メリダとタリファ公を例にー」（以下、「近世初期スペイン人…」と略記）『流通経済大学社会学部論叢』第29巻、第２号、2019年、199頁。

イェルサレム巡礼は、近世の日本人とも無縁ではなかった。キリシタン追放令後の1619年、日本人イエズス会士ペトロ岐部は、ゴア経由で単身イェルサレム巡礼を果たした。ペトロ岐部について、詳しくは五野井隆司『ペトロ岐部カスイ』教文館、2008年を参照されたい。

⑵　同上、199頁。

⑶　同上、199頁；関　哲行「追放期（15～16世紀）ユダヤ人の聖地巡礼ーユダヤ神秘主義者の著作を中心にー」（以下、「追放記（15～16世紀）ユダヤ人…」と略記）、科研基盤研究（B）⑴研究成果報告書『環地中海世界の聖地巡礼と民衆信仰』、平成19年（2007年）、138頁。

２．終末論とメシア思想

⑴　関　哲行「近世初期スペイン人…」、201頁。

⑵　同上、201頁。

⑶　関　哲行「追放記（15～16世紀）ユダヤ人…」、137-38頁。

⑷　同上、138頁。

⑸　同上。139頁。

３．聖地パレスティナへの船旅

⑴　関　哲行「近世初期スペイン…」、203頁。

⑵　同上、203頁。

⑶　同上、203-204頁。

⑷　同上、204頁。

⑸　同上、204頁。

⑹　同上、204頁。

⑺　同上、204-05頁。

４．２人のイェルサレム巡礼者

⑴　関　哲行「近世初期スペイン人…」、205頁。

⑵　同上、205頁。

⑶　同上、206頁。

⑷　同上、206頁。

⑸　同上、206頁；A.Graboïs, *Le pèrlin occidental en Terre Sainte au Moyen Âge*, De Boeck & Larcier, Paris, 1998, pp.89-90.

⑹　関　哲行「近世初期スペイン人…」、206頁。

⑺　同上、202頁。

⑻　同上、202, 209頁。1518-19年にイェルサレム巡礼を実践した、アンダルシーア地方の有力貴族タリファ公は、帰国後、セビーリャ市内に「悲しみの道」の「移し」ともいうべき「十字架の道」を開設した。タリファ公の館を起点とする「十字架の道」は、イェルサレムに赴くことのできない民衆の霊的救済装置として機能した。

⑼　同上、202頁。

⑽　同上、206-07頁。

⑾　関　哲行「追放期（15～16世紀）ユダヤ人…」138頁。

⑿　同上、140頁；J.W.Meri, *The Cult of Saints among Muslims and Jews in Medieval Syria*, Oxford University Press, Oxford, 2002, pp.214-15.

⒀　関　哲行「追放期（15～16世紀）ユダヤ人…」、137-38頁。

⒁　同上、138,142,146頁。

⒂　同上、141頁。

⒃　同上、147頁。

⒄　同上、143頁。

⒅　同上、143頁。

⒆　同上、138, 144, 146頁。モーセス・バゾーラが晩年サフェドに定住したことは、ユダヤ神秘主義者にとってのサフェドの重要性を示すものである。

⒇　同上、146-47頁。

㉑　同上、146頁；J.R.Magdalena Nom de Déu, *Relatos de viajes y epístolas de peregrinos judíos a Jerusalén*, Editorial AUSA, Barcelona, 1987, pp.82-83, 189-90.

5．結びにかえて

⑴　関　哲行「追放期（15～16世紀）ユダヤ人…」、148頁；四国巡礼を含む、前近代の比較巡礼史については、拙著『前近代スペインのサンティアゴ巡礼ー比較巡礼史序説』、流通経済大学出版会、2019年を参照されたい。

写真・図版出典一覧

終末（出典：F.Cardini, *Europe 1492*, Facts on File, New York, 1989, p.189）

ヴェネツィア（出典　堀越孝一他監訳『図説世界の歴史３』学習研究社、1980年、408頁）

グアダルーペ修道院（著者撮影）

「聖墳墓教会」に入る巡礼者（出典：F. López Alsina etc, *El mundo de las peregrinaciones. Roma, Santiago, Jerusalén*, Lumberg Editores, Barcelona, 1999, p.241 ）

「悲しみの道」（著者撮影）

ガリラヤ湖（出典：F. López Alsina etc, *op. cit.*, p.243）

「嘆きの壁」と「岩のドーム」（著者撮影）